

Lev, Y.

(1987) : "The Fatimid Princess Sitt al-Mulk", *Journal of Semitic Studies*, vol. 32, pp. 319-328.

(1991) : *State and Society in Fatimid Egypt*, Leiden.

森本公誠

(1970) : 「ムスリム商人の活躍」, 嶋田襄平 (編), 『イスラム帝国の遺産』, 平凡社, pp. 63-122.

(1982) : 「商業倫理と商業テクニク」, シンポジウム『東西交渉史におけるムスリム商業』, 中近東文化センター, pp. 2-11.

嶋田襄平

(1977) : 『イスラムの国家と社会』, 岩波書店.

Udovitch, A.L.

(1988) : "Merchants and Amirs: Government and Trade in Eleventh-Century Egypt", *Asian and African Studies*, vol. 22, pp. 53-72.

菟原 卓

(1987) : 「*al-Majālis wa al-Musāyārāt* に見られるファーティマ朝カリフ = アル・ムイッズ」, 『西南アジア研究』, no. 26, pp. 31-44.

(1988) : 「『ジャウザルの伝記』に見る初期ファーティマ朝宮廷の内情」, 『オリエント』, 31巻2号, pp. 18-33.

(1990) : 「ファーティマ朝カリフ=マフディーによるアブー・アブドッラーの肅正」, 『オリエント』, 33巻2号, pp. 36-52.

* 本稿は1997年度東海大学文学部研究助成金による研究成果の一部である。

- 39) *Sīra al-Ustādh Jawdhar*, pp. 92-93. もっとも、この場合カリフはそれを受け取らなかったようである。
- 40) ただし、ジャウザルがマフディーヤに残った理由はこれだけではない。その間の事情については、以下を参照せよ。菟原 (1988), p. 25.
- 41) Goitein (1967), pp. 31-32.

史料

- Jawdharī, Abu 'Alī Maṣṣūr al-'Azīzī al-
Sīra al-Ustādh Jawdhar, (ed.) M. K. Ḥusayn & M. Sha'ira, Cairo, 1954.
- Naysābūrī, Aḥmad b. Muḥammad (Ibrāhīm) al-
Istīṭār al-Imām, (ed.) W. Ivanow, *al-Jāmi'a al-Miṣriyya, Majalla Kullīya al-Ādab*, IV (1936), pp. 93-107.
- Nu'mān b. Muḥammad, al-
Iftitāḥ al-Da'wa, (ed.) W. al-Qādī, Beirut, 1970.
- Nu'mān b. Muḥammad, al-
al-Majālis wa al-Musāyarāt, (ed.) al-Ḥabīb al-Faqī, I. Shabbūḥ & M. al-Ya'lāwī, Tunis, 1978.
- Yamanī, Muḥammad b. Muḥammad al-
Sīra al-Ḥājib Ja'far, (ed.) W. Ivanow, *al-Jāmi'a al-Miṣriyya, Majalla Kullīya al-Ādab*, IV (1936), pp. 107-133.

参考文献

- Bloom, J.M.
(1987) : "The Mosque of the Qarāfa in Cairo", *Muqarnas*, vol. 4, pp.7-20.
- Canard, M.
(1958) : *Vie de l'Ustadh Jaudhar*, Alger. (*Sīra al-Ustādh Jawdhar* の仏訳)
- Dachraoui, F.
(1981) : *Le Califat Fatimide au Maghreb*, Tunis.
- Daftary, F.
(1990) : *The Isma'ilis*, Cambridge.
- 福田安志
(1991) : 「ヤアーリバ朝における通商活動とイマーム」, 『オリエント』, 34巻2号, pp. 74-92.
- Goitein, S.D.
(1967) : *A Mediterranean Society*, vol. 1, Berkeley & Los Angeles.
- Halm, H.
(1986) : "Les Fatimides à Salamyā", *Revue des Études Islamiques*, vol. 54, pp. 133-149.
(1996) : *The Empire of the Mahdi*, Leiden. (原版 : Halm, *Das Reich des Mahdi*, München, 1991.)
- Ivanow, W.
(1942) : *Ismaili Tradition concerning the Rise of the Fatimids*, Oxford.
- 岩武昭男
(1990) : 「ティムール朝アミールのワクフの一事例」, 『西南アジア研究』, no. 32, pp. 56-80.
- 川本正知
(1989) : 「ナクシュバンディー教団」, 『社会的結合』 (シリーズ世界史への問い4), 岩波書店, pp. 167-199.

- 13) Cf. Halm (1996), p. 51.
- 14) Dachraoui (1981), pp. 327-328; Halm (1996), p. 48. このような通信連絡や上納金の送付は、むろん王朝成立後も続けられた。菟原 (1987), p. 41.
- 15) イスマーイル派教宣員も多くの場合、商人の姿をしていた。たとえば、大アブドゥラーを捜しに出たダーイーたちは行商人の姿であった。もっと後のバフラインのダーイー、Jannābīは小麦粉商人であったし、イエメンの Ibn Ḥawshabも綿商人を装っていた。 *Istitār al-Imām*, p. 93; Halm (1996), pp. 31, 36.
- 16) サラミーヤを出た理由としては次のような状況が挙げられる。①アッバース朝当局がマフディー逮捕に動きだしたこと。②シリアで決起したイスマーイル派内の過激分子がサラミーヤをめぐっていたこと。 Daftary (1990), p. 134; Halm (1996), pp. 72-73.
- 17) *Istitār al-Imām*, p. 97. 菟原 (1990), p. 43.
- 18) マフディーの西方遍歴のクロノロジーは以下のとおり。902年サラミーヤ出発、903-904年にエジプト着、905年エジプトを発って、同年中にシジルマーサ着、909年シジルマーサ出発、910年1月イマームとしてラッカーダ(チュニジア)凱旋。菟原 (1990), pp. 38, 43; Halm (1996), pp. 143, 146-147.
- 19) *Iftitāḥ al-Da'wa*, p. 150. この史料については、菟原 (1990), p. 37を参照せよ。
- 20) *Sīra al-Ḥajīb Ja'far*, p. 113. Cf. Halm (1996), p. 89.
- 21) *Iftitāḥ al-Da'wa*, p. 151.
- 22) *Iftitāḥ al-Da'wa*, pp. 151-152; *Sīra al-Ḥajīb Ja'far*, p. 118; *Istitār al-Imām*, p. 106.
- 23) *Iftitāḥ al-Da'wa*, p. 153.
- 24) 菟原 (1990), p. 45.
- 25) 森本 (1970), p. 113.
- 26) *Iftitāḥ al-Da'wa*, p. 154. Cf. Halm (1996), p. 129.
- 27) *Iftitāḥ al-Da'wa*, p. 237. Cf. Halm (1996), p. 132.
- 28) 菟原 (1990), p. 45. 彼らが落ち合うのは王朝成立後のことである。
- 29) 菟原 (1990), pp. 45-46.
- 30) この間の事情およびジャウザルと彼の伝記については、菟原 (1988), pp. 18-24を参照せよ。
- 31) Cf. *Sīra al-Ustādh Jawdhar*, 校訂者注(67); *al-Majālis wa al-Musāyārāt*, p. 441, 校訂者注(3)。後者の史料については、菟原 (1987), pp. 31-32を参照せよ。
- 32) 菟原 (1988).
- 33) *Sīra al-Ustādh Jawdhar*, p. 69.
- 34) Cf. 菟原 (1988), p. 24; *Sīra al-Ustādh Jawdhar*, 校訂者注(74)。カリフ家一族の市中での振る舞いは、カリフやジャウザルから見れば、「恥ずべき行為」、「違背行為」であったというが、これにはカリフ家や宮廷に属する女性たちが、宮殿から市中に公然と外出していたらしいことも含まれる。したがってカリフの女性親族が商業と関わりあいを持っていた可能性もある。エジプト時代になると、カリフ家女性はその富裕さにものをいわせてモスク等の建築活動の後援者であった。彼女らの資産は基本的には、私有地からの収入であったと思われるが、同時に商業への投資を行っていたとしても不思議ではない。 Cf. Lev (1987), pp. 320-322; Bloom (1987), p. 17.
- 35) Cf. Canard (1958), p. 207, 注(452).
- 36) ただし、宮廷人とカリフおよびジャウザル側との軋轢のより根本的な要因は、カリフ継承問題に関するスキャンダルである。菟原 (1988), pp. 25-26.
- 37) ジャウザルに対する歴代カリフの信任はことのほか厚く、次期カリフ位継承に関して、カリフの内密の意図をうちあけられるほどの間柄であった。菟原 (1988), pp. 27-29.
- 38) *Sīra al-Ustādh Jawdhar*, pp. 116-117; Canard (1958), p. 177, 注(399).

リビアの一部)は空前の繁栄を享受していた。この地域は、インドやその他の東方およびエジプトやシリアの物産を、繁栄していた西方イスラム世界や経済的に興隆しつつあるキリスト教ヨーロッパに中継していた。〔ファーティマ朝〕チュニジアが大西洋にまで至る北アフリカ全土を制圧し、後にはエジプトやその周辺諸地域までも征服するのは、この経済的卓越によっている⁴¹⁾。本稿で述べたところは、カリフ家一族の経済的バックグラウンドの一面、およびイスラム世界における支配階層と商業との親密性に関する個別的事例にすぎず、ファーティマ朝の大発展を直接に説明するものではない。しかしジャウザルの例に見えるように、王朝貴顕の商業活動が単なる私的な家計の枠を超えて王朝の発展に一役買うほどの大規模なものであったこと自体、逆に当時のチュニジアにおける貿易活動の隆盛ぶりを窺わせているともいえよう。また、史料に垣間見える商人と王朝貴顕の接触の問題も、新興帝国の首都における商業の繁栄ぶりを象徴するエピソードとはいえないだろうか。いずれにせよ、ファーティマ朝の貴顕は王朝成立以前から商業と深く関わりを持ち、それは王朝成立後も変わることはなかったといえるであろう。

注

- 1) 森本 (1982), pp. 2-8.
- 2) 嶋田 (1977), pp. 188-190.
- 3) Goitein (1967), pp. 309-310.
- 4) Musabbiḥī の年代記には、西暦1024年、カリフのための交易に従事していた7艘の船の沈没の記事がある。また11世紀中頃 Nāṣir-i Khusraw はカイロへ向かう途次、トリポリおよびティンニースにおいて、カリフ所有の船を目撃している。トリポリの船はビザンツ、シシリー、北アフリカとの交易に従事していた。Lev (1991), p. 67. また11世紀中頃、個人的に商船を所有するアレキサンドリアのある高級軍人は、出入りの商人たちと取引関係を持ち、彼らを通じて交易に投資していた。Udovitch (1988), pp. 58-64.
- 5) 政治面のみならず宗教面をも含めた「支配階層」と商業との関わりについて、他の時代・地域における例として、とりあえず以下をあげておく。ティムール朝時代の君主シャー・ルフや高級軍人、また同時代のナクシュバンディー教団のシャイフ、ホージャ・アフラールらはキャラバンに投資していた。岩武 (1990), p. 76 ; 川本 (1989), p. 189. また17世紀半ば以降のオマーンの通商活動は、イバード派のイマームなどの統治者が主導していた。福田 (1991), pp. 74-92.
- 6) 大アブドッラーは9世紀の人物で、アフワーズ出身であったが、フーズィスターンのアスカル・ムクラムに移住し、その後バスラを経てサラミーヤに落ち着いた。Halm (1986), p. 139 ; Halm (1996), pp. 6-11. 彼の血統、すなわちファーティマ朝カリフ家の血統については、以下を参照せよ。Halm (1986), pp. 133-141 ; Daftary (1990), pp. 108-116.
- 7) Ivanow (1942), pp. 7-10. また本史料の英訳が Ivanow (1942), pp. 157-183 に収められている。
- 8) Cf. Halm (1986), p. 143.
- 9) Cf. Halm (1986), pp. 142-144.
- 10) Halm (1996), pp. 14-15によれば、‘Abd Allāh al-Akbar → Aḥmad b. ‘Abd Allāh → Muḥammad b. Aḥmad → ‘Ubayd Allāh al-Mahdi というのが、ファーティマ朝イマームの系統。ただし、ファーティマ朝の公式見解では、3代目は Ḥusayn b. Aḥmad である。Daftary (1990), p. 107.
- 11) この史料については、菟原 (1990), pp. 37-38 を見よ。
- 12) *Sīra al-Ḥāḥib Ja‘far*, p. 108.

いるのである。しかもそのような措置を、カリフは驚くほど好意的に肯定している。ここで、先に紹介した宮廷人のジャウザルへの非難のことを振り返って見ると、彼らには、自分たちに課せられた規制に比べて、ジャウザルの「繁盛」ぶりが目に障るということもあつたのではないだろうか³⁶⁾。さてジャウザルに対する上記のようなカリフの厚遇は、両者の間に存在する特別な信頼関係があつてこそそのものだが³⁷⁾、以下に述べるように、ジャウザルの商業活動は、カリフにとつても十分にメリットのあるものであつた。

ジャウザルの船がシシリーから輸入していた重要品目は、木材であつたと思われる。彼の『伝記』には：

マフディーヤで軍船が建造された時、帆柱や帆桁またそれらに類するもので完成させるべき最後の仕上げができなかつた。ジャウザルは自分の倉庫に良質の木材を持っていたので、それ〔の提供〕によってカリフの歓心を得ようと、その旨の上奏文を書いた。〔*Sīra al-Ustādh Jawdhar*, p. 119〕

とある。カリフの返答は、「その儀に及ばぬ」というものであつたが、別の箇所には、次のようにある：

シシリーから、ジャウザルの船で、大量の木材が彼のもとに届いた。カリフ様の造船所は木材を必要としていた。ジャウザルはそれによって歓心を得ようとするともに、カリフがそれを受け入れることを願つた。〔*Sīra al-Ustādh Jawdhar*, p. 121〕

カリフは、今回は、申し出を受け入れた。

ファーティマ朝がシシリー産の木材を輸入していたことは、『伝記』の他の箇所にも見え、時代背景から見て、それはエジプト遠征のために準備されていた艦船建造用のものであつたらしい³⁸⁾。またムイッズ時代の東方遠征については、ジャウザルが巨額の私財（10万ディーナールおよび2万2千ディルハム）の提供を申し出たという記述もある³⁹⁾。

以上を見れば、ジャウザルの商業活動が単に彼個人の私的利潤の追求以上の意味があつたことは確かである。カリフが彼に国庫金の流用を認めていたのは、ジャウザルの商業活動が王朝にとつても大いにメリットのあるものであつたからでもあろう。また史料に明瞭に記述されているわけではないが、次のように考えることもできるかもしれない。すなわち、様々な理由で直接に商業活動に従事できないカリフになりかわつて、ジャウザルがカリフの代理人を務める場合もあつたのではないだろうか。その点に関して思い起こされるのは、948年のマフディーヤからマンスーリーヤへの遷都の際にジャウザルがマフディーヤに残つたという事実である。内陸の新都マンスーリーヤに対して海港を持つマフディーヤに彼が残つた理由の一つは、個人的にもまたカリフのためにも、海上交易の差配に便利な土地を離れるわけにはいかなかつたからではないだろうか⁴⁰⁾。

むすび

本稿で扱った時代の地中海における国際交易についてゴイテインは以下のようにいう。「10世紀におけるファーティマ朝支配下のチュニジアとその属領（シシリーおよびアルジェリア・

スールに書状を送ったことを的確に知ると、ムイッズ——当時、皇太子だった——に書状を送り、その中で、彼らの恥辱・不名誉となることども、また彼らの醜行について述べた。〔*Sīra al-Ustādh Jawdhar*, pp. 62-63〕

ここには、宮廷管理者としてのジャウザルに対する宮廷人の不満の噴出が見られるが、本稿のテーマに関して注目すべきなのは、ジャウザルが、彼らの市場での行動を規制していたことである。この訴状合戦の経過を追うと、マンスールはジャウザルを支持したので、彼はカリフの命じたところから従って、人々を扱い始めた。すると宮廷人は、処遇に対する不満と、より一層の庇護を求めて、こんどはカリフ自身を非難した。この非難に関してカリフがジャウザルに書き送った書状は、宮廷人に対するカリフの激怒ぶりを生々しく伝える。カリフの激怒の理由は、宮廷人の非難が、マンスールのカリフ即位の正当性を中傷する内容を含んでいたためであるが、その経緯については、すでに別稿において考察したので³²⁾、ここでは、本稿のテーマに即して、以下の史料記述のみ紹介したい。「〔宮廷の〕人々はこの書状（マンスールからジャウザルに宛てた書状）のを知ると、〔行動を〕慎んだ。そしてジャウザルが峻烈で容赦がなく、また彼らとその下僕たちに義務を定め、彼らを統制し、商人たちに対して、彼らと関わりあうことを禁じたのを見て、恐れをなした。」そして実際、彼らと関わりあった商人たちが逮捕されて、処罰された³³⁾。

以上述べたところから、少なくとも、宮廷人（カリフ家一族）が市中の商人となんらかの関わりをもっていたことは明らかである。ただ『ジャウザルの伝記』は、背後にある事実関係を何も述べないので、その関わりが彼ら自身の商業活動への従事を示しているのかどうかについては、はっきりしたことはいえない³⁴⁾。

(2) カリフ家一族以外の貴顕の商業活動（ジャウザルの場合）

宮廷人に対して商人との関わりを厳しく規制したジャウザル自身が、商業に縁遠い人物であったかといえば、それはまったく逆である。彼の伝記には以下のようにある：

ジャウザルはシシリーの総督（wālī）である Abū al-Qāsim ‘Alī b. al-Ḥasan b. ‘Alī に書状を送っていた。その内容は——ジャウザルの船荷の勘定に何か不足があれば、カリフの金からそれを補填するように、そしてマンスーリーヤ（首都）の国庫にてそれを記帳するために、その額をジャウザルに報せるように——というもの。その後 Abū al-Qāsim からは、船荷100ディーナール分の支払いが残っていたので、所定の代理人（wakīl）にそれを支払ったという内容の書状が届いた。そこでジャウザルは、その旨および国庫長官（ṣāhib bayt al-māl）のもとにて100ディーナール記帳したことを報せる書状をカリフに対して書き送った。するとカリフは以下のように書き送った。「ジャウザルよ！神が汝を救済されんことを。汝の金は我らの金。我らの金は汝の金。まことに汝は我らよりも我らの金をよく保全する。〈略〉これらのディーナールは汝にもっともふさわしい……」〔*Sīra al-Ustādh Jawdhar*, p. 135.〕

Canard もいうように、ここに述べられているのはジャウザルの私的な商取引であると思われる³⁵⁾。ジャウザルは彼の個人的取引における不足額を、総督管理下の公庫金によって補填して

していたことは、側近の宦官ジャウザルにあてた書状中における彼自身の述懐によって知ることができる。この書状は、カリフが宮廷人 (ahl al-qasr : カリフ家一族, 特にマンスールの叔父たち, および兄弟を指している) に対して定めた手当てや年金に関して, 当時宮廷管理の任にあっていたジャウザルに向けて書き送ったものであるが³⁰⁾, その中には次のようである:

人々は皆知っておろう。余が若年の頃より, 家族と息子を持つまで, 一介の修道士のごとく, 現世をかえりみず, 俗世の楽しみを棄て去っていたことを。家族を得てからというもの, 余は正当の範囲内で商業に従事した。家族と息子に対する余の恩恵と恩寵がいかなるものであったか, 彼らに聞くがよい。まことに彼らは, ふんだんに与えられながら, 際限なく過度に得るまで満足しなかったものである。ところで彼らは, 余がイマーム位とカリフ位に就いた後には, 余のおかげで慣れ親しんでいた厚遇を失って窮することになった。それは, 余が商業および家族と息子が慣れきっていたやり方から離れて, 人類のために重荷を担うことに専念したためである。〔*Sīra al-Ustādh Jawdhar*, p.62〕

具体的にはどのような商業を営んでいたのかはわからないが, 皇太子時代のマンスールが家族により良い暮らしをさせるために, 商業活動にいそしんでいたことは明らかである。

マンスールの家族扶養の有り様については, その息子の第四代カリフ = ムイッズ (在位953-975年) の次のような言葉も伝えられている:

神が彼 (マンスール) をイマーム位にお就けになると, 彼はウンマ (イスラム共同体) のことに身を捧げ, 我々や彼自身のことを顧みなくなった。そして, 彼が我々に慣れさせていたもの, また彼自身慣れていたものの多くを減じた。そこで, それを苦に感じたある依存者 (カリフの被扶養者) がカリフに言った。「以前あなたがイマームになられる前, 我々がおかれていた状態にもどれればなあ!」と。するとマンスールは言った。「あの頃はお前たちだけのことにかかずらわっておればよかった。ところが今日, 余は全ウンマのことを案じなければならないのだ。」〔*al-Majālis wa al-Musāyarāt*, p.441.〕

商業への従事についての言及はないが, 全体の内容は上に引用したマンスール自身の言葉とほぼ一致している³¹⁾。

皇太子が商業にいそしんでいたのであれば, その他のカリフ家一族も商業に携わっていたとしても不思議ではない。しかし, 皇太子以外のカリフ家一族の商業活動を明瞭に示す史料記述は今のところ見当らない。ただ, 『ジャウザルの伝記』中にみえる次のようなエピソードは, 彼らが市場やその商人たちと関わりを持っていたことを示している。

先に挙げたカリフ = マンスールの宮廷人 (カリフ家一族) に対する処遇が彼らに伝えられた時の反応は以下のようなものであった:

マンスールからこの決定と書状が彼らに下されると, 宮廷人は皆ジャウザルを非難した。そして, さかんに彼の非をならし, 市場において, また一般人 ('amma) と交じって振る舞うことの自由を求めた。ジャウザルは彼らに対して, それらのことを禁止していたのである。それで彼らはマンスールに書状を送り, ジャウザルの命令に不平を言い, 彼を中傷し, 彼が無知で, その行為は不当であると述べた。ジャウザルは彼らがイマーム = マン

この人は商人ではない。この人はスルタンか諸王の王以外の何者でもない」と言っていたという²³⁾。このマフディー評は、それが実際のことかどうかはさておき、少なくとも彼が商人に身をやつしていたことを反映しているといえるであろう。

マフディー一行はマグリブ遍歴の後、一旦モロッコのシジルマーサに落ち着く。その後、909年チュニジアにイスマール派の覇権を確立した教宣員アブー・アブドッラーにカリフとして迎えられるまで、彼のシジルマーサ滞在は、少なくとも三年数か月以上に及んだと考えられる²⁴⁾。マフディーがシジルマーサを滞留地に選んだのは単にアッバース朝側官憲の眼の届きにくい僻遠の地であったからだけではなかろう。というのも10世紀後半の地理学者イブン・ハウカルによれば、「シジルマーサは東方のイスラム商人の植民地で、バスラやクーファあるいはバグダードの商人たちがすでに何世代にもわたって住み、彼らの隊商があげる利益は莫大で、イスラム世界の商人たちのうちでも、これほどの利益を得るものは少ない」²⁵⁾というような土地柄であったからである。つまりシジルマーサは、シリアの商人一行を装う彼らにとって、事業面での実利も兼ね備えた絶好の隠れ場であり、また革命運動を推進しつつあるイスマール派の首領としては情報通信面でも好都合な隊商都市であったといえよう。マフディー滞留当時のシジルマーサ領主は al-Yasa' b. Midrār であったが、ここでも「マフディーは彼（領主）に近づき、贈り物をして、親密な関係を保っていた」という²⁶⁾。そして、アブー・アブドッラーがマフディーを奉じようとシジルマーサに軍を進めた際、領主アル・ヤサウはマフディーに使いをやって、その正体を問いただした。マフディーの返答は、「私は彼（アブー・アブドッラー）に会ったことはないし、彼のことも知らない。……まことに私は一介の商人 (rajul tājir) である」というものであった²⁷⁾。

以上、史料の語るところによれば、カリフ即位以前のマフディーは、一貫して商人の外見を保っていたはずである。その「事業」が具体的には何なのか、また経営規模がどの程度だったのかはわからないが、実際にマフディーが富裕であったことは確かである。さもなければ、総督や領主に贈り物をするなどして親密に交際することもできなかったであろうし、そもそも供廻りを従えての数年に及ぶ遍歴など不可能であったろう。しかもマフディーはサラミーヤを出発する際、自らの女性親族一行（7名）に2名の家臣をつけて別行動をとらせており²⁸⁾、これにも相応の経済的裏付けを要したであろう。さらにマフディーは、シジルマーサ滞在中に、幾人もの随従者を新たに抱えるだけの余裕すらあった²⁹⁾。そのような富裕さの源が、世界各地のイスマール派信徒からの上納金であったことも否定しえないが、マフディー自身が（無論その先祖たちも）実際に「商会」のようなものを主宰していたと考えるのも自然である。

II 王朝成立以後における貴頭の商業活動

(1) カリフ家一族の商業活動

王朝成立後になると、カリフが自ら商業に携わることはなかったと思われる。しかしカリフ一族が商業活動に積極的に従事していたことを確かめることはできる。

ファーティマ朝第三代カリフ=マンスール（在位946 - 953年）が皇太子時代に、商業に従事

Hājib Ja'far』¹¹⁾によれば、「サラミーヤを委ねられたどの総督 ('āmil) をも、マフディーは丁重にもてなし、贈り物をし、最大限の好意を示した。それで、その地を委ねられた者は皆、彼が示す気前の良さのゆえに、彼の僕 ('abd) のようになった」とある¹²⁾。アッバース朝当局の追求を回避するための、いわば金にものをいさせた懐柔策であるが、それを可能にしたのは、マフディーの富裕さであったと思われる。では彼の経済力は何に由来するのであろうか。ジャアファルの回想には次のような興味深い記述がある：

ジャアファル曰く。あらゆる国のダーイーたちのもとからサラミーヤの彼のもとに金や財宝が運びこまれていた。〔マフディーの先代〕イマームは、砂漠の地中に、サラミーヤの自邸内に通じる地下通路 (sirdāb) を掘っており、その長さは12マイルあった。金や財宝は駱駝に乗せて運ばれたが、地下通路の扉は夜間に開かれた。駱駝たちは荷を乗せたままその中に降りていき、邸内でそれを降ろした。夜の間には駱駝は出ていき、地下通路の扉は土で覆い隠されたので、誰もそれに気付かなかった。その財産は莫大で、神がマフディーに勝利をお与えになった後 (= 王朝樹立後) にさえ、彼はせいぜいサラミーヤに残してきたもの程度しか得なかったと言われているほどである。〔*Sīra al-Hājib Ja'far*, p. 108.〕¹³⁾

ここにでる長大な地下通路の話は、あまりに非現実的で、まったくの作り話と思われるが、マフディーの邸内に金品が搬入され、貯えられていたこと自体は特に異とする必要もない。世界各地に散ったイスマーイール派の教宣員はサラミーヤの本部と通信連絡を維持し、現地の入信者からの上納金や贈り物は絶えず本部に届けられていたからである¹⁴⁾。ただ、町の中心部の市場近くに居を構えるマフディーが、これといった詮索を受けることなく、前述したように気前の良い長者であるためには、実際に表向きは商業を営んでいる必要があったであろう。そうであれば、多量の金品の搬入も自然なことである。むしろ憶測をたくましくすれば、先に引用したロマンティックな地下通路の話も、イマーム家の威光を飾りたてるために、「マフディー商会」の通常の営業活動を誇大に脚色して語ったものにとれないこともないのではなからうか¹⁵⁾。

さて902年マフディーは、身にせまる危険を察知してサラミーヤを離れた¹⁶⁾。居館内の財宝類はそのままに、息子 (後の第2代カリフ = カーイム) と6名の供廻りを従えての脱出であった¹⁷⁾。その後、ファーティマ朝の成立に至る数年間の遍歴の間¹⁸⁾、彼が商人を装っていたことは史料中にもはっきりと言及されている。マフディーはシリアを経てまずエジプトに赴いたが、ファーティマ朝の建国史 *Iftitāh al-Da'wa* には、「彼は商人に身をやつして (mustatiran fi ziy al-tujjār) エジプトに滞在した」とある¹⁹⁾。またジャアファルの回想によれば、エジプトでの寄寓宅の主人 Ibn 'Ayyāsh は、特にイスマーイール派とは関係のない人物であったが、当局の問い合わせに対し、マフディーが「ハーシム家の貴人で、教養と学識と富裕で知られた名立たる大商人 (tājir min wujūh al-tujjār) である」と答えたという²⁰⁾。さらにアッバース朝の追捕を逃れて、エジプトからマグリブに向かうにあたっては、「彼は荷の中に多額の金を所持していたが、それで商品を買入れ、その商品と共に〔残りの〕金を荷の中に入れた。そしてあるキャラバンに加わって、商人の装いをして (fi rifqa fi ziy al-tujjār) 出発した。」²¹⁾ ここにあるように、マフディーの一行はあるキャラバンに属してマグリブへ向かったが²²⁾、この旅の途中どこにおいても、見る眼を持った人は一様に、マフディーを評して、「まことに、

くが商人の出身であったという事実は²⁾、イスラム文化と商業との親密性を象徴するものであろう。このように、商人が商業以外の分野で活躍したことと呼応するかのようには、支配階層もまた商業活動に積極的に乗り出したようである。たとえば、10世紀から13世紀頃にかけてユダヤ人商人階層の残したゲニザ文書の中では、イスラム勢力下の地中海の海運業において、君主自身、君主の一族（女性も含む）、総督、軍司令官、宰相、裁判官などが船主として名をつらねるといふ³⁾。筆者の専攻分野であるファーティマ朝（909 - 1171年）においても、カリフや貴顕が交易や投機事業にかかわっていたことが指摘されている。ただこれらの事例は同王朝のエジプト征服（969年）後の時代に属するものである⁴⁾。そこで私は以下において、王朝樹立以前のイスマール派の革命運動時代からエジプト征服前までの時期について、カリフおよび貴顕の商業活動との関わりを跡付けてみたい。それは建国前後におけるファーティマ朝カリフ家の経済的バックグラウンドを探る試みであると同時に、イスラム世界における支配階層と商業との親密性という一般的テーマに対する個別的なデータの提供にもなるであろう⁵⁾。

I 王朝成立以前におけるイマームの商業活動

イスマール派の創設者と考えられている、大アブドッラー（‘Abd Allāh al-Akbar）⁶⁾は、外見的には、まったく普通の商人であった。それは、この大アブドッラーが、後にイスマール派の本拠地となるシリア中部のサラミーヤ（あるいはサラムヤ）に定着するまでの事跡を記した、*Istīār al-Imām* の中にはっきりと窺える。この史料はその物語的な語り口にもかかわらず、内容的には事実を反映しているものとされているが⁷⁾、それによれば、大アブドッラーをサラミーヤに住ませたのは、行方のわからなくなっていた彼を捜し求めた末に邂逅をはたしたイスマール派のダーイー（教宣員）たちであった：

これらのダーイーたちは Muḥammad b. ‘Abd Allāh b. Ṣāliḥ（サラミーヤの総督）のもとに来て次のように言った。「当地にバスラ出身の商人が来ており、他の商人と同じように〔この町への定住を〕求めております。」そこで彼（総督）は彼らにその者にふさわしい場所を求めよと命じたので、彼らは喜んで町の目抜き通りの市場地区に彼（大アブドッラー）を落ち着かせた。それから彼らは彼のために Abū Farḥa から家を買ひ、彼は、他の商人と同じようにサラミーヤに住んだ。……彼は一介の商人ではあったが（‘alā annahu rajul tājir），あらゆる国々に秘密裡にダーイーを送りこみ、また彼らを任免していた。
〔*Istīār al-Imām*, p. 95.〕⁸⁾

サラミーヤは総督一族の商業振興策によって、新たに繁栄してきた都市であり、商人の来住は歓迎されていた。大アブドッラーが、新参の商人として潜入するには、おあつらえむきの町であったといえよう⁹⁾。これ以後、サラミーヤの彼の屋敷がイスマール派の教宣本部となるが、大アブドッラーは表向きはまったくの商人として通していたにちがいない。

さてイスマール派イマームは、教宣活動を指導しつつサラミーヤで4代を数え、その4代目がファーティマ朝初代カリフ=マフディー（在位909 - 934年）である¹⁰⁾。マフディーの乳兄弟で、幼少時よりその側近くに仕えていた侍従が残した『ジャアファルの回想（*Sira al-*

ファーティマ朝貴顕の商業活動

菟原 卓

Commercial Activities of the Fāṭimid Imāms and Notables

Uhara Takashi

Abstract

It is well known that Islam favors commerce. Especially in the medieval period, trade was regarded as an honorable occupation, and prosperous merchants were highly esteemed in social life. Merchants were active not only in the field of economy, but also in the development of Islamic culture, and sometimes in politics. People of high standing were also sometimes involved in commerce. In the present article, I would like to show that the Fāṭimid ruling circles were also engaged in trade during the early period of their dynasty.

According to the primary sources, the Ismā'īlī imams, including the first Fāṭimid caliph al-Mahdī, disguised themselves as affluent merchants until the establishment of their dynasty. It is very likely that they were actually operating a kind of trading firm. After the establishment of their state in North Africa, the caliphs ceased to engage themselves personally in commercial activities. However, a crown prince was active in business before his accession to the throne, and other members of the royal household were associated with merchants in the market. As for courtiers of the dynasty, a prominent major-domo owned one or more commercial ships, and his profit from trade was so enormous that he could even support the expansion of the Fāṭimid state financially.

はじめに

イスラムが、他の宗教に比べて、商業活動に対して好意的な態度をとっていることはよく知られている。商業への従事は生計手段として高く評価され、アッバース朝時代の初期（8・9世紀）には既に商業利潤追求を宗教的に正当化する主張や商業礼賛論が著されたほどである¹⁾。商人は、経済の領域ばかりでなく、社会的・政治的・文化的にも重要な役割を演じた。特に、中世イスラム社会の精神的指導者層といえるウラマー（法学や神学などの「宗教学者」）の多